

知立耕平さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

kouhei@oh-kouhei.org



皆さん、こんにちは。三月です。いよいよ春本番。でもまだまだ寒い日が続きます。コロナも含め、くれぐれもご自愛ください。

かわら版では日常会話の中に含まれている仏教用語をご紹介します。知らず知らずのうちに使っている仏教用語。それだけ日本人の生活に溶け込んでいるということですね。

三月と言えば入試シーズンですね。入試に応募する人を「志願者」と表現しますが、この「志願」も実は仏教用語です。

「志願」という言葉は無量寿経というお経の中に登場します。曰く「世自在王仏(せじざいおうぶつ)、その志願の深広なることを知らしめて」とあります。「志願」とは、読んで字の如く「こころざし」「ねがい」を意味します。

世自在王仏は法蔵菩薩(修行して覚りを得た後は阿弥陀如来)の師仏(先生)です。つまり上記のお経のくだりは「先生である世自在王仏は、弟子である法蔵菩薩の志願がとても深く広いものであることをお知りになり」という意味です。どのような「深く広い」志願だったのでしょうか。

法蔵菩薩は修行の前に「誓った願い」「志願」のひとつに「衆生(人々)を救済したい」ということを掲げました。そして、実際に覚りを得て阿弥陀如来になったので「その願いは叶っている」つまり「既に人々は救われている」と考えたのが親鸞さんです。

さて、ここで登場した「誓った願い」つまり「誓願」も当然仏教用語です。

お寺や仏教に関心のある皆さんは「四弘誓願(しごうせいがん)」をよくご存じのことと思います。「四弘誓願」とは菩薩(修行者)が仏教を学び仏道を極めようと決意した時に、最初に立てる「四つの誓願」のことです。全ての菩薩に共通する誓願です。

七高僧のひとりと言われる源信さんは自著「往生要集」の中に「四弘誓願」を記しています。第1の「衆生無辺誓願度(しゅじょうむへんせいがんど)」は「地上にいるあらゆる生き物をすべて救済する」という誓願を意味します。

第2の「煩惱無量誓願断(ぼんのうむりょうせいがんだん)」は「煩惱は無量だが、すべて断つ」という誓願。第3の「法門無尽誓願智(ほうもんむじんせ

いがんち)」は「法門は無尽だが、すべて知る」という誓願。第4の「仏道無上誓願成(ぶつどうむじょうせいがんじょう)」は「仏の道は無上だが、かならず成仏する」という誓願。以上の4つが「四弘誓願」です。仏教のほとんど全ての宗派に共通するものです。

「今日は何だか難しい内容だなあ」とお感じの方が多いと思いますが、「四弘誓願」は仏教において大切なことですので、どうぞご容赦ください。

「誓願」は仏教発祥の地インドの古い言葉であるサンスクリット語で「プラニダーナ」と言います。そして、インドでは「真実の言葉には不思議な力が宿る」という思想があります。「真実の言葉」はサンスクリット語で「サティヤ」と言います。自分が何らかの誓いを立て、その言葉が真実になるように努力することです。「サティヤ」の力が高まり、それによって「願いが叶う」という考えです。日本語的に言えば「言霊(ことだま)」というニュアンスです。

「誓願」を立て、日々努力することが大切ですね。ではまた来月。

※

耕平

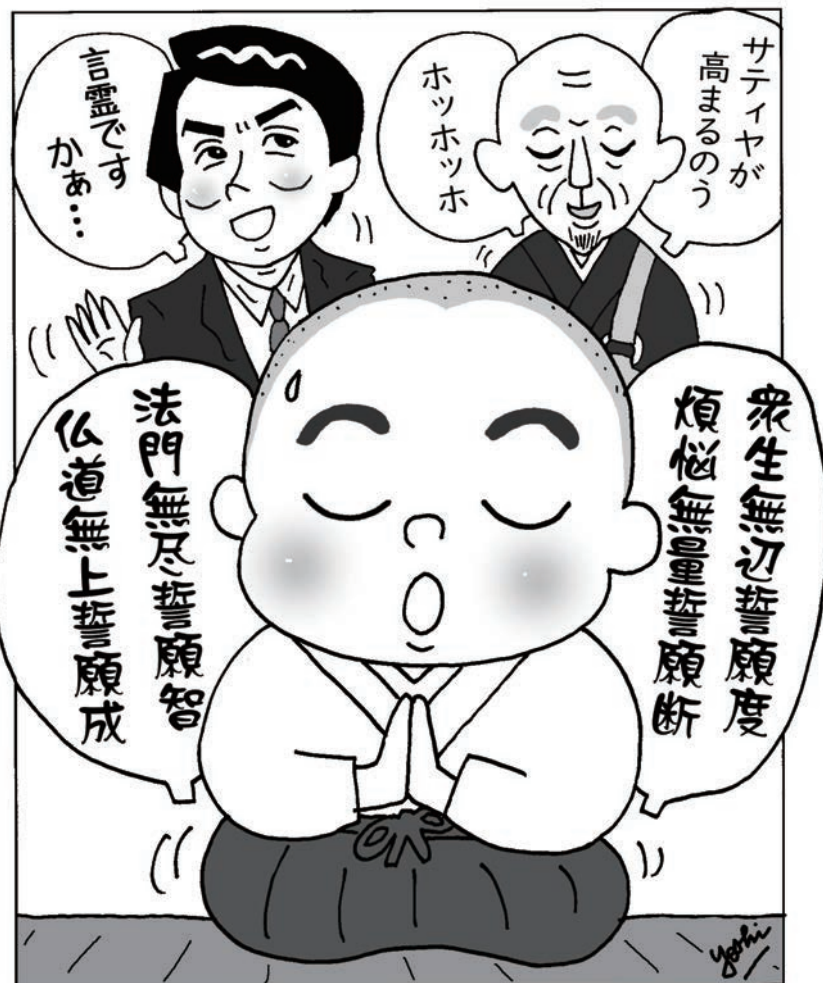
お知らせ

今年、令和7年1月から、「手配り」は縮小しました。

「山門」にかかわら版を入れた台を置きますので、ご自由にお取ください。

ご協力、よろしくお願いいたします。

かわら版編集部：
大塚耕平事務所 TEL 052 757 1955



知立 弘法さんかわら版

発行編集部

三月です。ご祥当です。いよいよ春本番ですね。でも寒い日もあります。ご留意ください。

二〇二二年から「尾張名古屋・歴史街道を行く」杜寺城郭・幕末史―をお送りしていますが、今年には名古屋城下町を起点に広がる臨街道についてお伝えします。今月は美濃街道・岐阜街道・岩倉街道です。

★美濃街道

名古屋城から北西から北に向かう道は、西から美濃街道、岐阜街道、岩倉街道の本です。順番に訪ねてみましょう。

美濃街道は東海道の宮宿と中山道の垂井宿を結ぶ街道です。

約十四里の行程で、**宮、清洲、稲葉、萩原、起、墨俣、大垣、垂井**の八宿があります。起までが尾張国、墨俣以降は美濃国です。

美濃街道を使えば、七里の渡しを避けることができ、かつ東海道の鈴鹿峠や中山道の急峻な山道を通らなくてよいことから、將軍上洛や大名の参勤交代、朝鮮通信使や琉球使節、

茶壺道中などに利用されました。茶壺道中は、都の宇治茶を徳川將軍家に献上するために茶壺を運ぶ行列のことです。

美濃街道は古代において既に原形が存在しました。萱津から北上し、尾張国の国府稲沢を通り、東山道の不破の関に出て美濃国の国府不破に至る道が古代美濃路です。

美濃街道は宮宿から本町通を北上し、やがて堀川沿いの道に入り、名古屋城西北の浅間町の角から西進し、枇杷島橋で庄内川を渡って萱津から清洲に向かいました。

★清洲宿・稲葉宿・萩原宿・起宿

清洲越しで町が寂れた清洲でしたが、美濃街道の宿となって活気を取り戻します。

宿に入ると鍵型の曲がり角があり、その辻に**清涼寺**があります。寺の梵鐘は時鐘として親しまれました。

清洲から北上して五条川を渡ると北西に向きを変え、**稲葉宿**を目指します。この辺りも杜寺城郭の多い地域です。

街道沿いの**長光寺**は、若き日の信長が境内で遊んでいたと伝わる古刹であり、信長愛飲の**臥松水の井戸**があります。門前の**四ッ家追分**の道標は、美濃街道と岐阜街道の分岐点を示します。

日光川の東に位置する稲葉宿は、一八四三年の記録には宿場町の長さ八町二十一間(約一キロメートル)、本陣一軒、脇本陣一軒、問屋場三軒、**旅籠屋八軒**、戸数三三六軒、人口一五七二人と記されています。

問屋場(とんやば、といやば)は、人馬継立、助郷賦課などの宿駅業務を担います。駅亭、伝馬所、馬締とも言いました。

稲葉宿からさらに北西に進むと萩原宿です。上述の記録では、**萩原宿**は本陣一軒、脇本陣一軒、問屋場二軒、**旅籠一七軒**、家屋二二六軒、人口一〇〇二人と記されています。

かつて本陣西にあった**萩原城**は秀吉の姉婿長尾吉房の居城です。吉房は豊臣秀次の父であり、秀次が失脚すると追放され萩原城は廃城となりました。江戸時代に尾張藩祖義直の**御茶屋御殿**が建てられました。

萩原宿から北西に進むと木曽川端の**起宿**に着きます。尾張国最後の宿場であり、木曽川を渡ると美濃国です。

起は小さな村でした。近隣の富田・東五城・西五城・小信中島の村々を加宿として、この起五ヶ村で伝馬役、人足役の宿役を負担しました。

起宿の戸数は二三〇軒、人口一〇三三人、本陣・脇本陣各一軒、問屋二軒、**旅籠屋二二軒**です。

起宿本陣は隣接する萩原宿や墨俣宿に比べて大規模であったため、紀州徳川家をはじめ、大名が宿泊しました。

起宿には、上(定渡船場)、中(宮河戸)、下(船橋河戸)の三ヶ所の渡し場がありました。將軍上洛や朝鮮通信使の大行列が渡る際には、船橋河戸に船二七〇艘以上を用いて船

橋が架けられたそうです。

★岐阜街道と岩倉街道

美濃街道は稲葉宿で岐阜に至る**岐阜街道**と分岐して行きました。岐阜街道は美濃街道四ッ家追分から中山道加納宿までの連絡路です。

尾張藩は毎年長良川で獲れた鮎の御鮎を江戸幕府に献上して行きました。その際、岐阜街道を使って長良川から名古屋城下まで御鮎を運んだことから、岐阜街道は**御鮎街道**と呼ばれるようになりました。

清洲宿で美濃街道と分岐したのは**八神街道**です。矢合、祖父江を経て、木曽川を渡って美濃国八神に至ります。八神には、関ヶ原の戦い後に尾張藩に仕えた毛利家の八神城がありました。

岐阜街道の東には**岩倉街道**もありました。名古屋城下の枇杷島橋西詰が起点であり、清洲の四ッ家追分から美濃街道と分かれ、小田井・九之坪・石仏・小折を経由して、江南、扶桑、犬山に至ります。柳街道の別名もありました。

清洲越しの後、庄内川右岸の下小田井に設けられた青物市場に野菜を運ぶ輸送路として活用されました。庄内川に唯一架橋されていた枇杷島橋に近く、城下町の大量の需要に応じるために尾張北部から野菜が運ばれました。

★岩倉城と生駒屋敷

来月は岩倉街道沿いの**岩倉城と生駒屋敷**についてお伝えします。乞ご期待。

